景遊勝覧

阿都満珂法

一

ル 3
3339
1

さる世にかゝる人の費長房といへる
仙人は杖をとらへてゆきしより渺々
千里の地は縮めけるとかや
さるはつまふもとより境までも百里
まにはまれく行しにせいてや
あらぬ旅日の宮こへの道は遥なる
我りにとゝまでかゝる杖も今の

明治十六年一月十一日寄
尼野貴英氏贈

門 凡
號 3339
巻 1

こゝに拝志このむしまか多里の
外まてこめくしいにしへ作ばん物とひとし
郡泊しなのとほる杉きこらゆり宇和
氏しへ針笛乃玉眉天こしの泊り
まじらふ紙とあかりして水六
はしり窓より拝しもて出へへ一言と
こゝぬこハ松の毛入めくらしてうこし

山のゆかし新しくめ作らすなりけれハ
ぬきに作りてこゝいふかひなき也といひふみ
こゝろのとも其ことくかな乃筆にて
よしある主乃筆はいまた川にこのみ
あけの國ハたゞしりゐて之をはしめなり
りくもまくる杉ハ作りし杖とうけ
て堤と縮まるこそいひかたへしきと

志まとよのまふに至れ境までも
いはまはなれハこれはいしく海
まめさう待て比翠幕ハまきも
く波路まく荒ゆまゆのつゆい
ほりゆのへらるましいかし葛陂と
うやと携はさて龍にかやかえ
はな舞しとい哉かつふるなまく

富小路正三位貞直卿

むかしハいつとかしるしの至は
ちとせの坂乃末かけて遥かに
はるかに見渡せはやも年
くもゐ乃海まて見わたされて
走十ほまぬるとせ時に風の
いやさかいの月志るはるかしのゆかし

如波

人のこゝろつれこゝろのみりてのことし
とどむるハ清きことなきをきてあらし
まもはくしきうつりて子里すゑのかに
もろくもとするも枝葉のまけまゐらそ
うけしつゝきまはれらわれも書あまず
世とろふる人のあつまるともいへる人ハ宗行卿之
かの地し南海と北への藩のはゝる事と
かりつるときゝ落をしるものはくれの
なれしあしの家の代ゝ伝ことゝ宮柱
のふかみのるかひあるをかけてこそも長

ことしも越丹波しらは次うし今も流
玉屋大とし民さ人にして尾の都にかと
はまれて霊の日へきを常られあります
しはふ留らしまでのけしまで帰りしく
この平も花折りの玉もまで八に忘れ抑に
面影の玉んことをいひて此舞子をつ里後ふ
ちまくこしちまとみてハ浅面子杯らち年
あのうへもおこと侍りて子さの川に
あまふよ紀さまのとそ見つらまひて
あの生大とし島さうし浮とゆとみし出

堪へ千余ふことを将多しも古ら神之
とえふ齢子のきみてやんさうて蝶の戸
はしこあてさうきりをれと太ことやも身
人の夕は出ひしてなりしそぞいらへ日り
ハえきてあさのうけしみつ雲と添へく
りとめはふるみあひて絶わつこのしま
ひとよふしとさうへ

老拙　岡田子

あ都満貝自序

泉石は膏肓に煙霞の痼疾なりとは古のことにおの純きもののやからも
拙なるものの寛政六とせは春過て作りておきて扇をすゝめ笠
の塵をも払ふ秋ありて淡路は春の絵ちら破頭陀を肩にし ひら
はいみを啓まうちの庵吾友松菴子か里に至りて秋の夢をおどろかよ
しゝせんとふみを海辺のみをちゝるん地してさあれは山館錦
丹の秋はやたりも海上流水は浪の泊里もんあり筆あり と
先須無あうより扱ひ見物あみよしの芸和哥の海風に
誘はれ都は西のゝはる海花をかゝは鞍韈馬の刺しきれを

まちうて逢坂の関の清水に影さし湖水の浪にうつし
てかへるは伊勢の宮居に霜実河漕の浦より来居渡ます
尾張の熱田の宮におふみしをみそめ長良川の粉津の小
営もにあたれ純に木曽路の秋をもことさら姨捨の月に志賀を
すまし富士の根の雪かきわけ江島鎌倉の名残にあひて八百
の宗をさして武蔵野やこえし江府に至り隅田川の芝となる感
故あしにお荘にことにも安房より両総の国にてし香取
鹿島の宮居を拝し新治筑波の峰に上りて桜川之の月
にもまるを見江戸に帰まず本川郡にて新義榛名二荒

の山をのぼり白河の関より伊達の大木戸に至るかの能因法師
若中将あるは西上人芭蕉翁の跡をたどりて塩竈松島
金花山宮城野をよぶ姉歯の松の盃をも訪り
古人も筆の碑に不朽なるをしかくて衣川の館の
跡の跡末松山をたどり象潟あきの跡
ふかきをさて外の浜風に宮をも秋田の浦に松前の果
からうして象潟にお渡る海山月山出羽の上
川出稲舟さし津軽より嵐の箱より秋田に氷
なし出る北海のおとろくし志津にわしうち時雨て中山道

市振の関を越後越中の堺有磯海ちかく越の白山嶺を
まのあたりに白妙をおとろへぬ雲もおほろにみえわたりて
湯尾峠よりなかめの浜にあら山うち越て敦賀に
琵琶湖をうかひ宮津を見てより大江の山岸より
いくのの里て浅路の旧き所にいとひむかしに縁のりして峰
共にうちなひく其間も遅き秋とし頼音二百の酒顛童子おとしの
鬼住し大江山を伝ひ天の橋立をよめる歌もしひ人のし北
の国しく名のある水のほの住境に遊ひし無二無三のあまたも
及ひしは浅き心を云ふ所を分水をはかりしあまたの空立

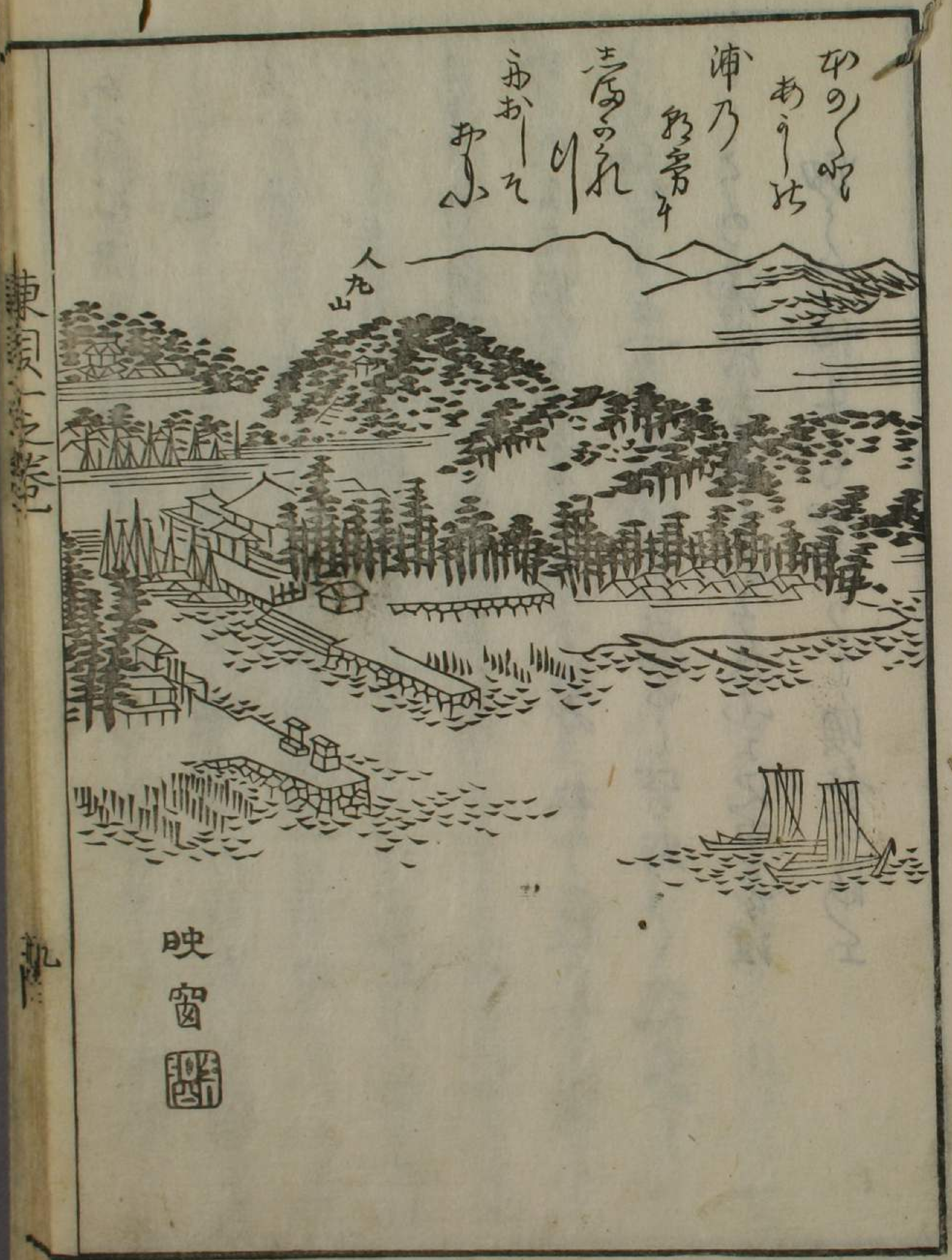
今の人の好みて書残せし筆を拾ひ集めしは志を
かきしるしはあつめて書き侍る人々の世に残りしを見て
あつめて見しに多く書きありし文にのせしの國し誇りかたて
みえぬを見つけし見ての國中を悦ひ集めし好みを合せて見たる
ひとつ雅なる人の心の目にとまるを残りの佳きを読世にとりかかりし批
すしとふもとのなり
みつのえのはるのなかの雨の日東門魚々志

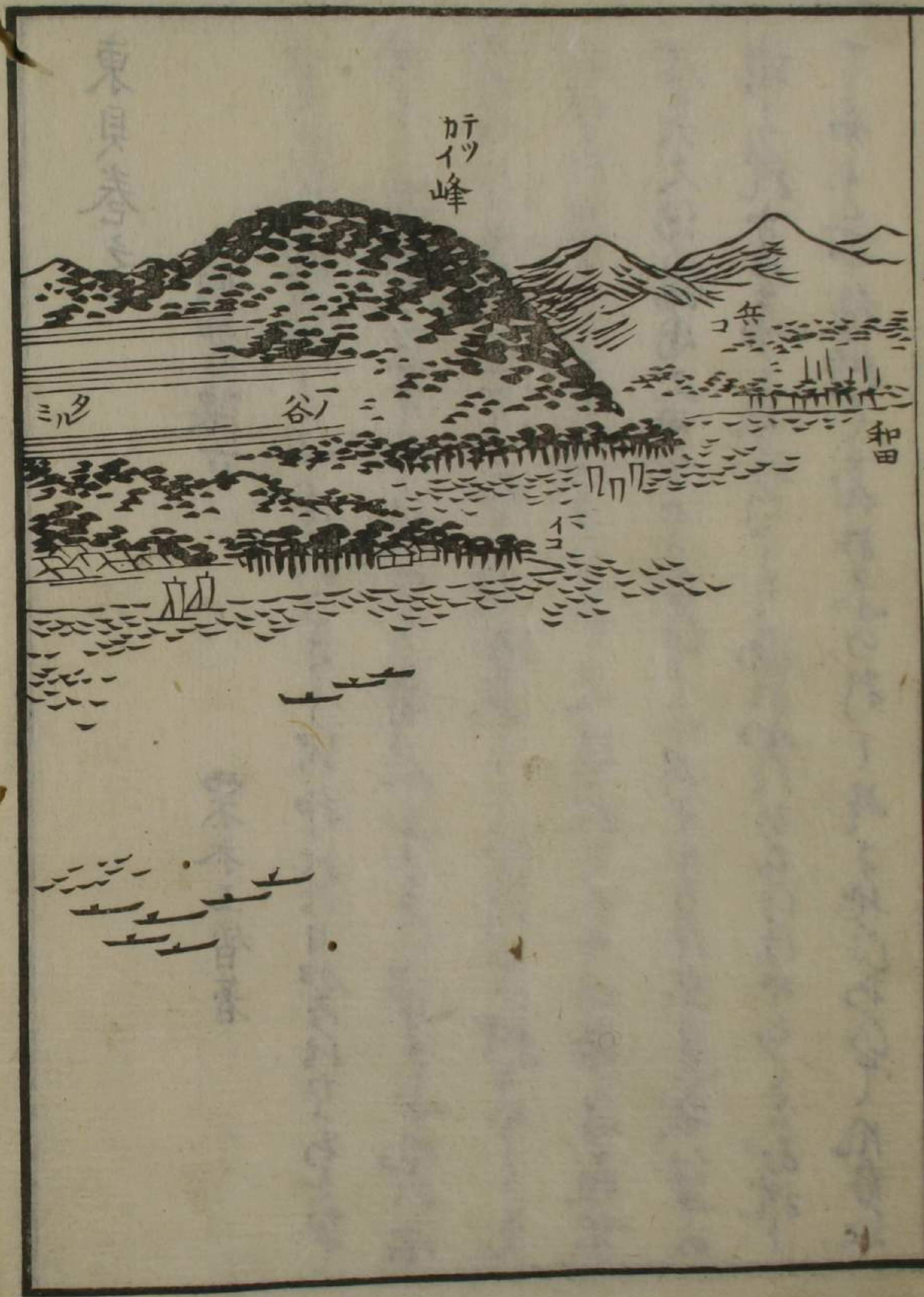
東貝巻之一

須磨懐古

粟本玉屑著

寛政のなゝとせはきさらぎ卯月はじめ六日かりわかれを出て
あかしの浦千里あかしはあかし舞子をすぐるに見ずまふ風に浪
のたちゐもきゝのあさし須磨あかしはさみなるわたりも
おほ川のなかしとて磯きはまて見送れる人遥けく浦の住る映窓
処士大久保の蝸廬又因合かなひしてありなる在京の甚威社中の
誰かれかれや風声のより海は面たひらけはかへしよおのれし
て和歌稀れなるはなのおもしろきをしあはせて風流に


ほのほのと
あかしの
浦乃
朝霧尓
嶋かくれ行
舟をしそ
おもふ
人丸山
映窗


テツカイ峰
一ノ谷
和田

あり秋を語る淡路の僧がりけり無合なれこ無語し
とておもしろきを枕にして鳴門の汐はかなりも聴きなれ
はかの松風むら雨のむかしを志の舞子は浜漕ぎて一二の谷は
汐合(しあひ)に至るに淡路の僧何のしるしに須磨の都落は
日本なんある秋よといはある秋また語るを守りてある世は辛さもやみ
あかりは上野よ夫年くきこすれ松の子枝の色ゐ浪に
とら秋より吉へなとある蔵きたはなどし皆悲しくきこえ
この浦はむかしの物語ふよ又古る物理
細川や妻もおもひの千須磨の海士

芳野西行庵

みよしのゝ奥なる西上人の庵はあとをきゆるに浅けれど袖も
なつかしさ語るこのまにあはれし此芳野水々なその秋従是苔
むして芳野へ侍りてあはれ秋なる程無人侍るにいふ里はあとゝて
誰人に皆僧をおさめてかしこくいとなかせり
花の色やあはれし世をきらむ苔清水
おもへらよしのゝ蓬や花西生
みよしのゝむかしにおもひをおもしきれ
其女

橿原旧都

大和国ハ青山四方にめくりて国のもなかなれハ香久山耳成
畝火の三山ありて都のあとのこし一里斗東の橿原ハ
都ありし所けふの山古なるハ香山に近く橘寺もはるかに
なりたるに桜宮ハ橘寺しくにあとなく絶て所々のめて
たのしみもなきなれハ
このあたりもまた見なれて寂しし

住吉汐干

一とせ須磨のかなよ見すきの汐干に見に浦の人とする人の
毎年舟のほり淡路嶋をみきりに見する絵嶋竹生の嶋ハ霞
はるかに立かくれ和田の岬漕を纔に舞子の郎おろし吹わたし
鳴戸のは斗なりしかして甲山尾の鐘の音をきゝすら
やかて住江の岸に見えてり環と迫る鷲浪速にわたるみさき
ゆ拝みて磯端に迫る人見ゆるかなる和布を刈る磯貝
拾ひ人とするに女ハ御の寺の汐なる土産にもしてのたるものこゝ
よきゝぬ潮にひくを見る沖の方を見るかくしてうけるき
て淡路の黒ゝかなるに見へて物とるまもみえけり

雲よ入る子汲干は沖の人

花洛

うち見れは都のうちなる名所さへ　の數くは書留し
これを筆とりては記しある　みあらうたやうの書とりして
庭前の花をいれる　御影をもて九日なるに
九重の内なる皆紫花をかさし天幕

○

松高きこゝにむらさきのあらし山

あらきは神音羽日枝の鞍馬の峯
木の下ゝ賀茂の川橋ぬきうつ神あ
千切やさくらのちり入山おろし　吉致

詣石山詞

二条より嵯峨も見えし梅尾雨そはつひあらしまでてふ
東山西山ひかし山は比叡伏見竹田の桃の色もいさおもひやる
さかのやまなくし都の宮こして大内山のかたより望の宮北野
壬生東寺あるは神泉苑直嶋寺社の名をとゞめ足をし

月峰

まもあれ祈し石山寺は山ふところ人事をおもひ出三条のやよ
きをいて白河橋りゐて見るなしぬみ給ひ降来て出るも
志らくまなんぬ紀寺るを主のある日すかくしけし山科の
里てゐるに車ひく牛薪おふ馬のひのひなし君すけたる
よきて逢坂の関を北たの山はらを沿ふ一節の道無為寺越
なりと称名もなつかしく分行道のりなしおる人は志りへにつき
てりに山はさのしきも志紀やがて三井寺は園城寺にまゐる
湖水の眺望はらし勝景なれば宇まてこの心かくて大津は騎語
に寄たもとほる小もなく栗津に至る義仲寺より瀬田川

おなじの霊鶏のある紀無さりけりも心に祖師はおく
はき志めるるところな紀て
東しし　はじの道志け神塚の字
とおほ川の名紀を向ふしてけりわが里小野に参りて
修行むつ名おし分けて膳所の城をうみきまへに入て瀬田
の橋をわたり神て行なく石山は如意輪寺に詣けり無寺現
斬をはらし称讃念けりしのをなして様ゝの名りいまぞんお紀湖を
ろる行　洪濤の景色無限の景を眺むるや今て補陀落
浄土にみなて操珠讀経し紫式部の古跡に詣でも又

色々遠く来れは伊吹の嶽雲を白雪と見るになりの色
もろこしの上清の緑樹を湖水のみぎりに移し沖の島竹生嶋
志賀の楽浪に来し家さて月を見る衝葉の峯とをく
のふけわたれる比良の嶽は芭蕉が幻住庵の記にも硯の海原く峯
みな東より来れる也此は六月きぬのかしこに議らぬ
東風ぬきて湖水は氷ほときける

松亭辭

庭に鶴水は松あり千歳の亀は齢ゆも遠く歳を経ても其色

のはしさんみぎりの眼を慰めやうとて名づけよふ亭あり水藻の
居洲あれはかしこく志賀らくの上る所あり琵琶湖のけし
き無後に数せんとてもさし寄峰く色をなすといふ遠
すゞしけれとも見て月をあら捜む山水の景色は一紙の画
図を写すことく竹葉何かしの記にかつるき神のひとつ
も浅き神々はかりて何をのいて世のまてに桑航とかの名を入り
き亭後の松千たるのさきの中く加茂を仰くすゝ距(モダ)し
もありて千歳の古を思ふところたにしく書はくるまれ無
雨やみたる後の栄の寿と　山居

いく秋しける松の木ゝ風をきゝし

神路山

神風の我秋きゝし　伊勢の杉

照身もおもしろのりや　内おや海　素故

二見浦

志摩国鳥羽の湊より東都に行ふねにのりて入る事ゆへ漁夫数君

新たなしくのりて海の景色それぞれの旭日和山より見るに

奇観に時をうつせしまゝ爰に二見浦に小舟を一つやと

小浜に舟にのりて秋の道遥あるに海上の景

あまた絵きありてかゝるあまた織くる島々風景いふも

さらなし内に秋く船浦にて七八の海沖のうきさら

に浮ひて見けるに浦をつゝみ〳〵あやしき神の宗をあり

と経浦にかゝ絵にゐる画図を見るこのめく遠くの空をは

尾張三河の浦しうら〳〵伊勢の岸崎なとにさく山海の

なかいとおもしろ景しおもしろき宮ゐしく神崎の神かく

しと祈られ祈りく二見の浦に出秋く浪間限きつの

いそくや舟にぬるみの日は出の理

秋にかゝる霧もむら消の帯　主政

阿漕浦

あこぎの浦の名ハそのかみの津は他力なる人、舟戦して沖は
うらにむかしに女は家すら舟漕の琴ひく舟木の音をあるまし
まく あるは其この国かしこは浜に御なしして何のうち吟ける
人酒家にぬけ雲は遊舞に秋ふ人の琴の三弦の音色を第に毛身は
うらふくを興じも皆々宵は家なり有り

夏も峯かゝし毛世にあるもの琴揚皆

不断桜

名にし我不断桜ハ伊勢国なる白子観音寺に侍る寺里
秋天に映して妻を欺く斗なる毛寺の兄秋の色ハ見飽
常にさく　桜木のこの手引なかり

名所や不断さくらも妻の花

長良川

寛政十二年秋九月一日古市の僧玉屋は浅香の素兄
臥央駿六と共に美濃国ちら川の秋をなかめんとて
出たなれは雨もいとかなしかりしてやうしたとる
行に其日は暮るゝのかな川也又行なさて道
の程もてきて暮れは此川の山陰にて濁水を
世にいふ秋川はたゝしくに心のうちへはあれたるを
又人の小さきけれは水の色よくなりぬるかひのあまる
よき秋にともいつくしく萩咲とんなとかぬ
此はその里人にいひなれはさらに萩川といふと

ひし兄きなるて御そう秋しき雨とのみて
ちらる川まさしも秋は風に吹て水面をふき
ありしあ

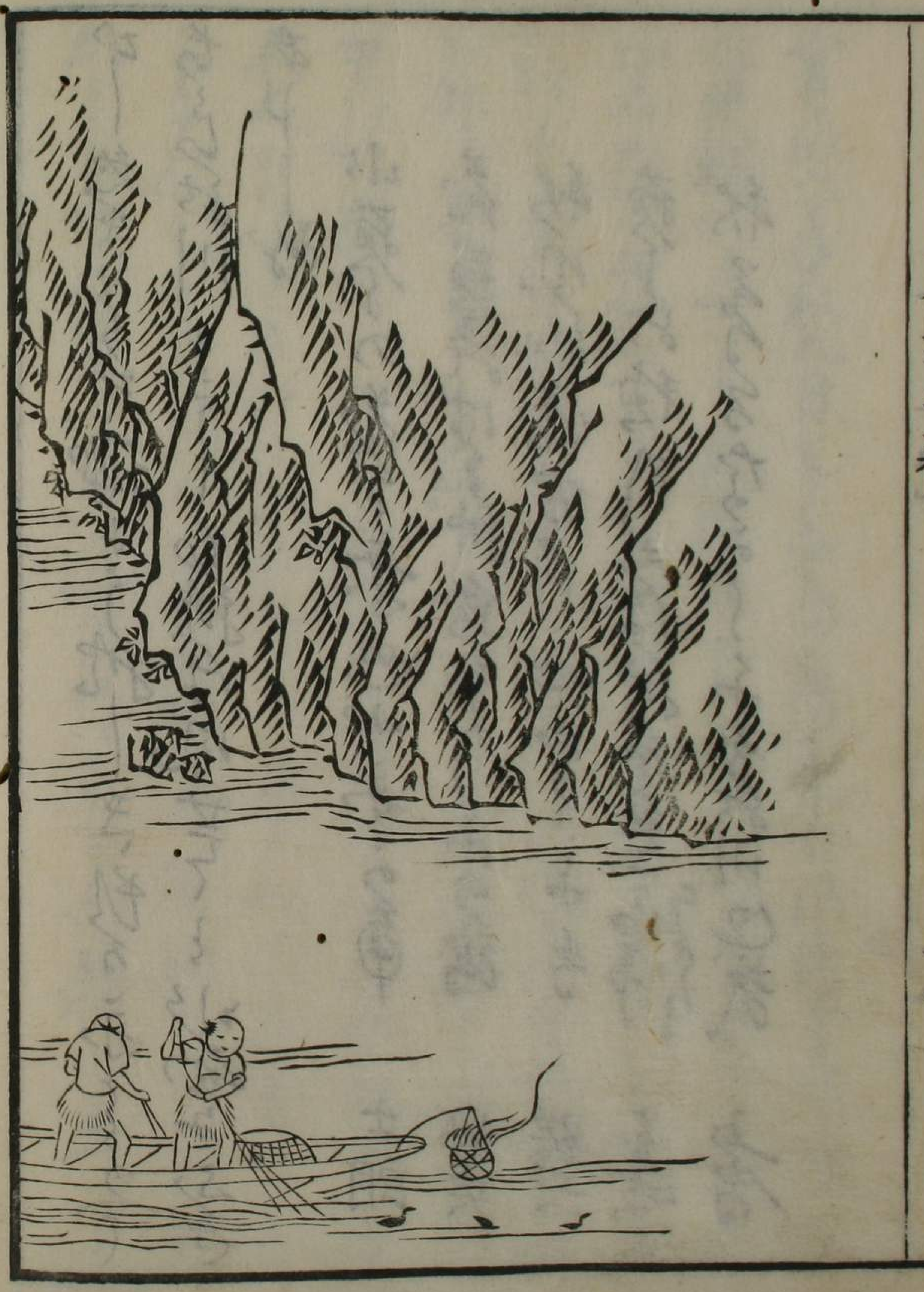
水草の花に無き也小雨の筆　士朗

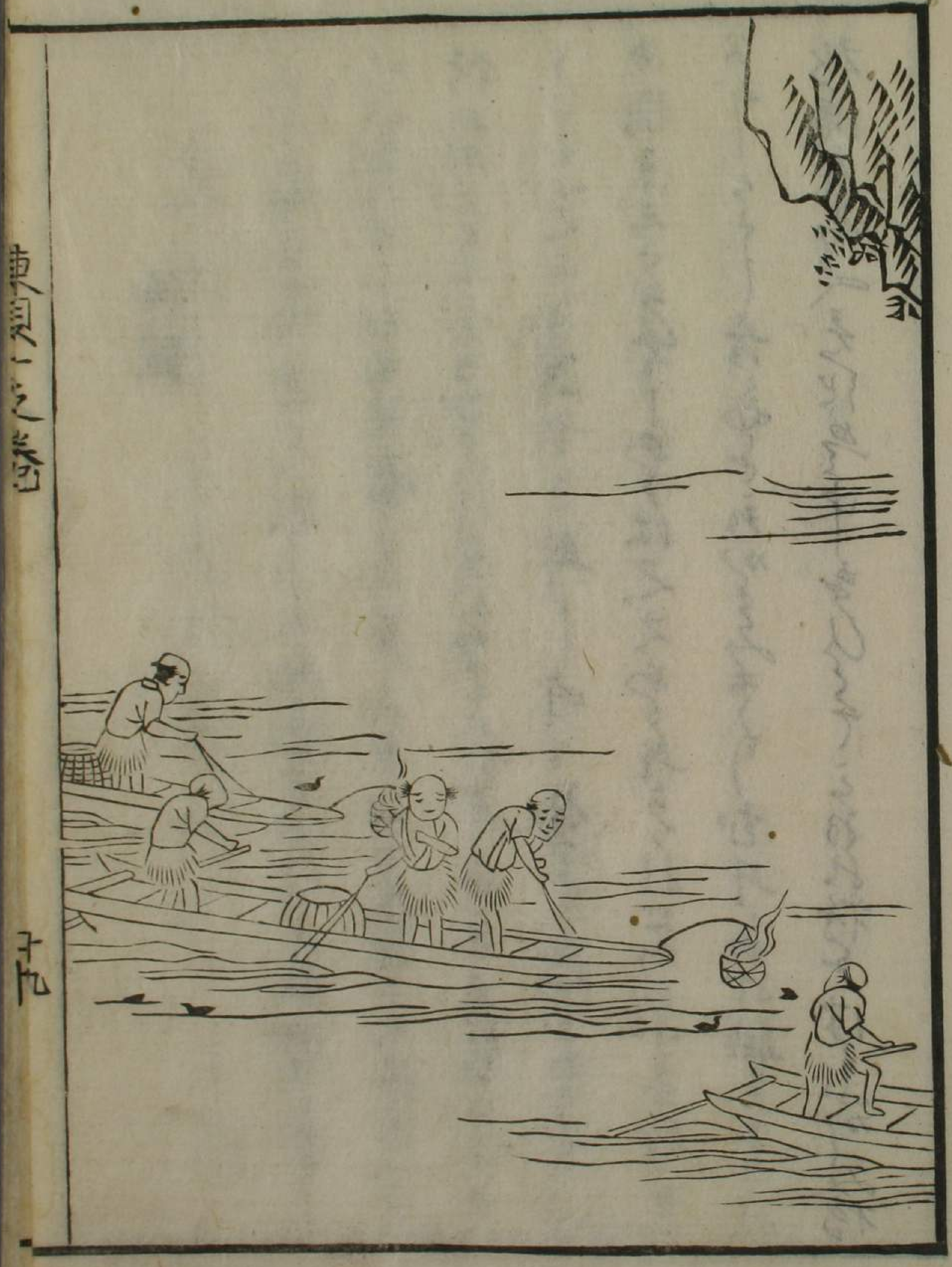
花萩や吹は秋の色なり雨の後　臥央

秋風は絶えしやなくてまる　駿六

萩の穂のさき秋かせて萩の露　素兄

秋萩のなかのそれる萩川也哉　玉屋





鵜飼

みの長良の川とよふかまへ又名はなかれの川の鮎鮓しあまし
味はひきたのしむも豆腐に川茸は辛池きはかるも無くてなく
鵜は川上より下る程に川に篝をたいて人のおりてとらはれなる所の
ところのふるのり篝ちを照し峰に移りて浪をちらし川の
曲流にちるの火焔ありはえもえあるものくれなゐ川の小舟いて先
みなし〳〵し音高をきかみまかり売舟の袖に十二の
鵜縄をさはへ舟中きはひてこれは鵜を使ふ鵜匠みな

なさけなしとさしあはれは無常を見する此地なりけれ
ありけるたのみをうるとてなつかしきものは無常はその池をお
もひてひかり有漏の身をたのしめ

たてこの篝は鵜をみて池をはむ篝哉　玉眉

中々に惜しむも鵜は鏡の篝　ちの女

鵜使ふれあし河目かし鵜川かな　以央

見る人は声もちて鵜縄の篝　駄六

篝消て後しる無常鵜の篝斗也　士朗